

川瀬家といふのは、麻布の廣尾にある富豪で、其今亞米利加へ行つてゐる子息とは、小野たちも高等學校時分から友人で、池田などは學費の補助を受けてゐた家だつた。そして池田は今でも、その家に寄寓してゐるのだつた。

「さうか、それやアいゝね。併し、君はどうするんだい。」

小野は鳥渡不審に思つて訊いた。

「僕か。僕は今迄誰にも言はなかつたが、今度結婚するよ。それは君のとは違つて、すつかり定めて了つたんだ。來月頃、故郷へ歸つて式を擧げることになるだらう。」

「へゝえ、さうかい。」小野は落着いて、まじく廣い顔を微笑せてゐる池田を、今更驚いて見守らなければならなかつた。「君がかい、へゝえ。」

「さうかねえ。すると杉浦のことでもなけれやア、世はおしなべて春なんだね。」

小野はそんな風に、わざと咏嘆的に、感慨を洩らさずにはゐられなかつた。平常から、自分を飽くまでも醜い男と一途に思ひ、誰も相手にしてくれないとのみ信じて、遂に女性に興味を持たなかつたばかりか、結婚生活などには初めから何物をも求めないで、結婚するとすれば、不具か何かで金がある人と、犠牲的にまた物質的に結婚してもいゝとまで、よく云つてゐた變り者の池田が、さういふことになつたとは、この際がこの際でなかつたなら、躍り上つて嬉しがるところだつた。

「なアに俺のなんぞは、君のやうなのとは違ふ。君もさういふことになつたんなら、何より幸福ぢやないか。まア精々成就するやうに努力しろよ。杉浦のことは心配するに及ばない。まつと何でもないから……」

池田にさう云はれると、何でもないやうであつたが、やつぱり小野には、池田に別れて一人になつてからも、あの時暗へ出て行つた杉浦の、後姿がちらついて、氣になつてならなかつた。

杉浦は果して何處へ何しに行つたのだらう。

## 第十 章

池田にさう云はれたにも係らず、杉浦の行方について、小野は猶まだ心配を去る譯にはいかなかつた。彼はその足ですぐ勝見家を訪ね、馨子夫人に面會して、事情を訴へた方がいゝと考へた。

併し、彼は心の奥で鳥渡躊躇した。若し杉浦が、ほんたうに冬子嬢に戀してゐて、そのために家出をしたのだとすれば、その事態を正直に勝見家に知らせることは、杉浦に對する同情を増させるかも知れない。そしてそのために、當人の冬子嬢を初め、馨子夫人の小野に對する心も、幾らか動揺するに違ひない。少くとも當分は、小野の求婚に應ずることを、逡巡しないとも限らない。それは小野にとつて、可なり苦痛なことである。だから、池田もあゝして大丈夫だと云ふのではあるし、この際、杉浦の行方について心配などは、小野一人の胸の中に藏つて置いて、勝見家の人たちなどには、そんなことは聞かせないがよい。そんな餘計な取越苦勞なんぞをするには及ばない。……

が併し、また小野は考へ直した。果して杉浦が自分と冬子嬢との問題のために、苦痛を感じて家出したとすれば、——小野は心の底で、飽くまでさう信ぜずにはゐられなかつた。——その當事者であ

る自分は、それはやむを得ぬ事情とはいへ、兎も角も罪があると感じない譯にはいかない。罪は此方  
 にないにしても、少くとも杉浦のために少しでも苦痛を和らげ、ことなく済むやうな處置をとるのが、  
 親友としての務めだ。たとひ直接その方法は、とるべき道がないにしても、心配するだけ心配するの  
 でも、此方の心は済む。親友が自分たちのために苦悶して、萬一のことがあるかも知れないときに、  
 略々その事情を推察してゐながら、安閑としてゐる譯にはいかない。たとひ自分の方の事態が、その  
 ために少しは面白くなくつても、その位の犠牲は拂ふべきだ。さうだ。是はやつぱり勝見家の人たち  
 に打明けて、向うの裁量を仰いだ方がいゝ。少くともその方が公明正大だ。さうしてたとひその結果  
 自分と冬子嬢との婚約に、支障を來たすにしてもそれは止むを得ない。……

その上、小野はかうも考へた。若しその位のこと、冬子嬢と夫人の心に、動搖が起り局面が轉換  
 するならば、それでもいゝ。さういふ薄弱な基礎に立つてゐるならば、寧ろその方がいゝ。だからこ  
 の際、勝見家の人たちに杉浦のことを打明けて相談するのは、一つは自分たちの問題の試金石だ。殊  
 に杉浦がふいと家を飛び出したことを、冬子嬢に知らせたなら、若し彼女が杉浦に特別の好意をもつ  
 てゐるとすれば、その心配の素振りに依つて、それが明白に解るだらう。それは小野にとつて、觸れ  
 るのが恐ろしい問題ではあつたが、かういふ機会に知り得れば却つていゝ。……

そんな風なことを考へながら、小野は家の方へ歸る途中から、眞つ直に勝見家の方へ赴くべき電車  
 に乗り換へた。さう決した彼の心は、何となく緊張して勇んでゐた。彼の心の奥には、事態が思ひが  
 けなくこんな風に切迫して、物語的な方向をとつて來たのを、強ひてまた物語的に考へて、喜んでゐ  
 る心がないでもなかつた。そして杉浦の行方を心配してゐながら、何かことがあるのを望んでゐない  
 ではなかつた。その上どつちへ轉んでも、小野は苦痛を受くる者ではなくして、その相手を心配し氣

遣ふ位置にある。——彼は殆ど今は、杉浦の行方をいろ／＼と推察して氣遣ふのを、享樂するやうな  
 氣持にすらなつてゐた。

勝見家に着いたときは、もうすつかり夕暮れて了つて、慕しい夕飯時の燈火が、家中に溢れてゐた。  
 一家の夕飯はもう済んだらしかつた。

夫人は茶の間の方で、長三氏と何か食後の雑談をしてゐた。丁度よく、まだ宿直の人も客も來て  
 のなかつた。小野は今朝此處から歸つたばかりなのに、またすぐ勝見家を訪ねたことを、何となく家  
 の人々に咎められるやうな氣がして、それですぐ用件を云はずにはゐられなかつた。

「奥さん、鳥渡、——お話ししたいことがあるんですが……。」  
 彼はかう云つて、少し事件が重大らしく、夫人を客間の方へ招き出さうとした。

「さうやー」  
 夫人は少し大儀さうではあつたが、何かと思つて蹤いて來てくれた。夫人は何か冬子嬢と小野自身  
 との、問題だと思つたらしかつた。

「お話つて何？」  
 座が定まると夫人は促した。

「實は杉浦のことなんですがね。」小野は座を正しうしたまゝ、さも大事さうに云ひ出した。「杉浦の  
 奴昨夜あれから、かういふ葉書を僕に寄越したまゝ、何處かへ行つて了つたんです。……」  
 かう云つて彼は、昨夜からの杉浦の行動を、一通り夫人に物語つた上、正直に思つた通りを告白  
 した。

「……で、僕は何だか杉浦が、どうしても僕と冬子さんとの問題に苦痛を感じて、ふいと下宿を飛び

出したとしか思へないんですがね。それで若しさうだとすると、その儘に棄て、置けないやうな氣がしますんで、心配して御相談旁々此方へ上つたんです。」

「ふうむ。さう？」夫人は葉書の裏表を、二三度引繰り返して見てゐたが、別にさう動じもしないですぐ云ひ出した。「でも、ほんとにそんな原因で、何處かへ行つたんでせうか。私何だかさうは信じられないわ。だつて杉浦さんは、そんなことを考へてゐる人のやうぢやないぢやありませんか。」

「いや、併し、あれでなか／＼色んなことを腹の中で思つてゐる男ですからね。あゝやつて、何とかうつそりしてゐますが、なか／＼隅には置けないですからね。」

「それやアさうですわ。でもあの人が冬子のことをそんなに思つてゐるなんて、私考へられませんか。」

「でも、少くとも僕の方へ取られることは、苦痛だつたかも知れませんかからね。」

小野は池田に云つた場合と、同一のことを此處でも論議したのだつた。

「そんならそれで、何もそんな風に家を飛出したりしなくたつて、外に仕方があるぢやありませんか。お友達同志の間なら、貴方に打明けたつていゝんだわ。私に云つてくれたつていゝぢやありませんか。」

「それやさうですけれど、またそんなことを懸つてゐるのが、杉浦なんです。どうしても僕にはさう考へられてならないんです。強ひて小説的に考へるんでなくて、あの時の顔で直覺してゐるのです。」

さう強く云ふと、夫人もその問題に就いて、論議するのは止めたが、今度はぢつと小野の方を見返して、結論的に云ひ出した。

「でも、そんならそれだからつて、どうもできないぢやありませんか、黙つて様子を見てゐるほか。私は決してあの人は、萬一のことなんぞあるまいと思ひますよ。そしてその中に無事に歸つて來ますよ。またたとひ貴方の心配してゐるやうなことがあつたにしたら、もう仕方がないぢやありませんか。」

せんか。歸つたらよし、歸らなかつたら、その時のことですわ。……」

かう云つて夫人は、更に小野の顔色をぢつと窺つて、性根を見定めるやうにしながら、云ひ添へるのだつた。

「だつて貴方は、杉浦さんが若しほんとに冬子のことを思つてゐたとしたら、貴方の方で思ひ切りなさる？」

「さあ。」小野は鳥渡躊躇した。が、すぐまた顔を上げて答へた。「それはできないかも知れませんが、……いえ、できません。」

「さうでせう。そんならそれでいゝぢやありませんか。杉浦さんのことは杉浦さんのこととして。——仕方がありませんわ。」

その夫人の言葉は、小野にとつて千鈞の重みがあつた。彼は、杉浦の身の上を心配してゐるとは云ひ條、やつぱり心の奥で、實はさういふやうな夫人の言葉を、後楯として要求してゐたのだつた。そして杉浦のさうした行動に依つて、夫人が殆ど動かされないのを、何より安心に思はなければならなかつた。

「さうですね。幾ら心配したつて仕方がありませんね。ぢやアア様子を見ておませう。」

「きつと何でもありませんよ。」

夫人も池田と同じやうに、別に心配してはゐなかつた。

そんなことで、小野は勝負夫人の許を、辭して歸ることになつた。戸外へ出ると、春の浅い夜は晴れて、星がうす寒い空に、一ぱい撒き散らされてゐた。小野はまた杉浦が、何處の空にどうしてゐる

だらうと、感傷めいた氣持に襲はれた。が、それは決して、重苦しい心配でなくして、何となく嬉しいやうな、憐憫の満足感だつた。

……翌日、翌々日と、それでも小野は、何處からか何か杉浦に就いて、凶い知らせでも來はしまいかと思つて、心待ちに待つてゐた。まさかそんなことはあるまいと思ひながら、何處かの海岸か山中から、彼が不明の死體となつて發見されるといふやうなことを、小野はひそかに期待しながら毎日の新聞面を探したりした。が、そんな所には勿論、何の手がかりもなかつた。

と、それから三日目のことだつた。小野はまた宿直で、遊びがてら夕方早くから勝見家へ行くと、夫人が彼の顔を見るなり云ひ出した。

「あの小野さん、杉浦さんから貴方の所へ、お手紙が來てゐますよ。早くあけて御覽なさい。茶の間の、筆筒の上にありますから。」

「さうですか。どんな風の手紙です。」

「普通の手紙よ。よつほど開けて見ようかと思ひましたけれど、何か秘密な用向でも書いてあると悪いから、その儘にして置いたよ。」

小野は早速自分で、茶の間の筆筒の所へ行くと、その手鏡などを置いてある前に、見覚えのある劃の大きい杉浦の字で、自分の宛名を書いた一通の手紙が、重々しく置いてあるのを發見した。

小野はその大きい宛名を見、それから「成田にて、杉浦生」と書いた裏を返して、その可なり嵩のありさうな内容を量つた後、すぐその場で封を切つて見た。何だか別狀はなさうに見えても、何が書いてあるかと思つて胸が少しどきどきした。

中には、やはり大きな角ばつた字で、宿屋のらしい粗末な巻紙に、太々とかう書いてあつた。

今俺は此處にゐる。一昨夜あれから不意に、銚子へでも行つたら頭がなほるだらうと思ひ立つて、取り敢ず兩國の停車場にかけつけて見たら、もう成田行の最終列車しかなかつたので、參詣の連中と一緒に此處へ來て、餘り上等でもない宿屋に泊つてゐる。この頃はさう參詣者がないと見えて四邊は静かだ。俺は例に依つて寝つかれないので、按摩をとつて貰つて寝た。そしたら宿では、女按摩にしませうかと云つた。千葉縣は風儀の悪い所と聞いてゐたが、その外には君を喜ばすやうな材料はない。唯昨日、君が景色がいゝと云つていつも話す三里塚の牧場の方へ行かうと思つて、町外れで道を訊いたら、そこが暖味宿だつたと見えて、白粉を塗つた女に盛んに遊んで行けと勧められたが、振り拂つて出て了つた。君ならさぞ惜がる所だらう。成田山へは來た序だから參詣した。が、俺は君と違つて、神佛の前で手を合せたりするのが嫌ひだから、別に前途の幸福も祈らなかつた。たゞ、君のためにと思つて、お神籤をひいてやつたから、有難く頂戴するがいゝ。君のよくひく一錢銅貨を入れて、下の口から出る辻占とは、第一有難味が違ふ。しかも素敵にいゝ籤だ。同封して置いたからお禮を言ひ給へ。何か外にお土産と思ふが、君にはそれだけで澤山だらう。奥さん初め、勝見さんの人々によろしく。皆さんにお土産を買つて行きたいが、銘仙でも要らないといふ人があるんだから、わざと買つて歸らない。君から呉々もよろしく云つてくれ給へ。この手紙は勝見さんの方へ出す。君が多分其方へ行つてる頃だと思ふから。

頭も癒つたから、明日か明後日歸る。

小野辰夫殿

成田にて

杉浦

生

そして同封の神籤といふのはかういふのだつた。  
 『第二十四番吉。』

臘木春將<sup>ニ</sup>至<sup>リ</sup>。芳菲<sup>ニ</sup>喜<sup>ビ</sup>。再新<sup>ニ</sup>。鯤鯨興<sup>ニ</sup>。巨浪<sup>ヲ</sup>。擧釣<sup>ヲ</sup>。祿爲<sup>レ</sup>眞。

ふゆごもりの木春をむかへて、はなさきさかえるごとく、わが身自由になりて、幸を得てよるこび  
 あるべし。』

小野はその呑氣さうな、併しまた少しは自棄を包んだやうな手紙の面を繰り返して讀んだ。  
 初めは『なアんだ。』と思つた。こんなことだつたのかと思つた。人が心配してゐたのに、やつぱり  
 杉浦は、こんな小旅行に出たのだつたか。——さう思つた。が、併しよく文面を見直すと、何となく  
 此方の氣のせぬか、妙な引かゝりがあるやうに感ぜられてならなかつた。第一に、小野の下宿へ寄越  
 さずに、勝見家へ宛て來たこと、それも底意があると見れば、見られないではなかつた。それからま  
 た、冬子嬢のことに、たゞ僅かに土産一件のところ、微かに觸れたきりなもの、疑へば疑へない  
 ことはなかつた。『銘仙でも要らない人』といふのは、實は冬子嬢のことだつた。それは嘗て大寺氏が、  
 故郷へ歸つた土産に、何か銘仙でも一反買つてきて上げませうと云つたのに對して、冬子嬢が要らな  
 いと斷つたといふ話を、彼女が無欲である證據として、夫人から、小野や杉浦は聞かされてゐたから  
 だつた。

「どんなお手紙? 何か祕密なことでも書いてあつて?」  
 小野が讀み且つ考へてゐると、向うから夫人が聲をかけた。さう云はれて、小野ははつと己に返つ  
 た。さうしてこの手紙が、表面上何ら不穩な所のないのを、改めて意識した。

「いゝえ、何でもありません。呑氣なことが書いてあります。奥さんの御想像通り、もう明日あたり  
 歸つて來るやうです。……まア鳥渡御覽なさ。」

小野はかう云つて、夫人に手紙を手渡した。

夫人もそれを一通り讀んでゐたが、

「まアつまらないことが書いてあるのね。」

と、時々微笑を洩らして、そして巻き返しながら小野に云つた。

「やつぱり何でもなかつたでせう?」

「え、さうでしたね。」

小野も多少の疑念はあつたが、兎にも角にも、杉浦の失踪が、無事に收まつたことに、安堵を覺え  
 たのだつた。と同時に、もつと重大なことを待ち設けてゐたのに、こんなことに終つたのは、何と  
 なく不満足な氣分だつた。何となくその手紙に對して、妙に腹立たしさのやうなものさへ、感じられ  
 てならなかつた。けれどもそれは、夫人の前では様子にも現はさなかつた。

……それから一兩日經つて、やつぱり小野が勝見家へ行つてゐるところへ、杉浦は今旅行から歸つ  
 たと云つて、心持黒くなつた無事な顔を現はした。

「やア歸つたね、どうだつたい。」

さすがにその顔を見ると、小野は懐しげに聲をかけた。

「うむ、なか／＼面白かつたよ。」

かう云つて杉浦は、非常に快活に話し始めた。そして制服のポケットの中から土産は買つて來な  
 いと云つたに係らず、成田土産らしい木製の小さい瓢箪が何かの、帯へ下げるものを取り出した。その

顔には、小野の豫期したやうな曇りは少しも見えなかつた。たゞ何故か餘りに快活だつた。快活過ぎる位は、しやいでゐた。

二

併し杉浦の様子には、それつきり何ら小野たちに對する、不満な様子は見えなかつた。それは何ら小野と冬子嬢との問題に、小野が取越苦勞をしたやうには、暗弱も投げず支障をも來さずに済んだ。小野ももう少しも、杉浦が苦痛を感じてゐるだらうなぞと思はなかつた。そして嘗てさう信じたのを、今は杉浦に濟まないやうにさへ感じた。杉浦は今や小野の、やつぱり心を打明ける第一の友であり、そして小野の第一の同情者だつた。その方は、小野にはもう、すつかり安心だつた。

が、妨害は別な方面から來た。

或日、小野は例に依つて、何も知らずに勝見家を訊ねて、夫人と客間で話してゐると、夫人は何か話の序に妙に、眞面目な態度で、小野にこんなことを云ひ出した。

「……小野さん。貴方作家として身をお立てになるお積りなんでせう。」

「え、まアさうです、できれば……。」

小野も何の前提に夫人が、そんなことを云ひ出したのかと、怪しみながらも兎も角もそんな風に答へた。

「そんならね。今の中にしつかり勉強しておいて、立派な作家になつて下さいよ。」

夫人は前から、小野たちに對しては、子供に對するやうに訓戒を興へるのが常であつたが、この時の語調には、何となく特別なものを含んでゐた。

「え、自分でもしつかり勉強する積りなんですけれど、僕は御存じのやうに、かういふ怠け者ですからね。」

「まアこの二三年は自重して、さう書いたりなんぞしない方がいゝと私思ひますよ。先生なんぞは四十近くまで書かなかつたぢやありませんか。餘り早く書き出すと、佐々木さんのやうに書けなくなつて了ひますよ。」

「それやア先生は別ですが、僕だつて書かずに、ゆつくり勉強ができれば、さうしたいんですけれど、書かないとまた寂しいし、書くことがまた一種の勉強ですからね。」

小野は辯解的にさう答へた。一體に磬子夫人は、それも無理のないことではあつたが、何ごとにも漆石先生の尺度を凡てに當てはめて、物を律する傾きがあつたので、小野はできるだけ軽く、反抗したのだつた。

「でも、そんなら、人に餘り兎や角う云はれるやうなものは、發表しない方がようござんすよ。私、貴方がつまらないものを、書かないでも濟むやうな補助はして上げますからね。できるなら今の中にみつしり勉強して、行く／＼立派なものを書いて、貴方を悪く言ふ人たちに目に物見せてやつて下さい。」

夫人はかう訓戒的に、かう強く云つた後につけ加へた。

「大寺さんや何か、先輩のお弟子の人たちは、貴方をまるで駄目だつてさう言つてますよ。」

「はア、さうですか。」

小野は夫人の訓戒の前には、一言もなく首垂れながらも、先輩の弟子たちがそんな風に、夫人に云つたといふのを聞くと、顔を上げて、

「どうしてですか。」といふやうに、夫人の顔を見返した。  
夫人は續いて話し出した。

「實はね。貴方にこんなことを云つていゝかどうか分らないけれど、まあ黙つてお聞きなさい。實は昨日、大寺さんが家へ来たのよ。そして貴方のことに就いて、私に忠告を與へて行つて下さつたの、有難いことには、ね。」

夫人は鳥渡此方の氣持を庇ふやうに、まづ内容を語るに先だつて、ちらりと冷笑を洩らした。

「どんなことを云つて行つたのです。」

小野は少し坐り直して、訳かざるを得なかつた。

「つまりね。私が貴方を信用し過ぎてゐるのがいけないつて云ふのよ。そして貴方と冬子とのことも幾分か氣が付いてゐるらしいのね。それで私が貴方を信用して、冬子の配偶として迎へるやうなことがあつては勝見家のためばかりでなく、冬子の不幸だからつて、さう云ふのよ。貴方は人間としては、ごく輕薄才子だし、作家としても、加藤紫白、ね、あの程度の通俗作家にしかなれないつて。——それなのに、貴方は野心を以て私に取入つて、百方阿諛してゐるので、私が餘り信用し過ぎてゐるから、氣を付けるつてさう云ふのよ。何でも、それが先輩一同の意見なんですつて。」

夫人はかう云つて、憤慨と冷笑との餘喘を洩らしてゐた。

「へゝえ、そんなことを云つたのですか。へゝえ？」かうまづさりげなく答へたが、小野は内心、燃え立つやうな憤慨に囚はれない譯にはいかなかつた。が、心を鎮めて、さうして靜に言つた。

「それやア成程、僕はこんな人間ですし、つい軽い快活な性質から、用もない所へ出しやばつたり、興に乗り過ぎて、脱線したりしますから、輕薄にも見えるでせう。また作家としても、まだ自分で

ら自信もなく、海のものとも山のものとも見當がつかない位です。或ひは大寺さんのいふ程度まで、行くかどうかすら分りません。——（それは小野の、悪い皮肉な謙遜だつたが。）」が、併し、野心があつて、奥さんに入つてゐるからとか、また僕と冬子さんとの問題に、そんな意味で反對されるなんて、僕の身の不徳から出たことゝはいへ、實に心外です……。」

小野は少し涙をさへ湛へて、かう縷々と述べた。  
夫人も續けた。

「それでね。貴方と冬子との結婚を、私が許すとしても、先輩一同は擧つて反對するんですつて。これが若し、柳井さんとか、和島さんとかいふやうな人々ならいゝが、貴方ではどうしても反對するんですつて。」

「へゝえ。」小野はさすがに、憤慨を抑へることができなかつた。自分を、人及び藝術家として、批判的に物を云つてゐるのは、まあ幾らかこの際許せるとしても、柳井や和島ならよくて、自分は飽くまでもいけないと、そんな風に先輩たちの、好悪や世評やに支配されて、人物を見究めせず云つてゐると聞いては、たとひそれがさう深い意味でなく、不用意に云つた言葉としても、小野は内心嚇とならずにはをられなかつた。「そんな甲乙を付ける權利は、あの人たちの何處にあるんです。それも甲乙を付けるだけならまだしも、それで以て、僕の私生活にまで、交渉する權利は何處にあるんです。それやア柳井は、秀才でもありまた生活も安定で、文壇でも今賣り出しの新進作家ですが、僕だつてその點は友人ながら尊敬するのに吝かでない積りですが、人物として僕との間に、そんな差別を付けられれば、誰だつていゝ氣持はしません。それに和島さんだつて、今でこそ少壯哲學者然と、鶴沼の細君の家か何處かに收まつてゐますが、前に谷口や、何かと『新思想』をやつてゐた時分は、赤い

トルコ帽を被つたり、また戀愛問題でも、今あの江上といふ人の細君になつてゐる人を、返子の海岸で云ひ寄つて、自分の願ひが容れられなければ自殺するつて、短刀を出して砂の上に倒れたといふ、有名なゴシップさへある人ぢやありませんか。だから先輩の人たちが、そんなことを云ふのは、決して正當な批判から出てゐるのぢやないんです。みんな好悪の感情か、僕に對する反感から出てゐるのです。」

「それはさうよ。貴方が私にうまく取入つて、勝見家の實權を左右するかのやうに、一途に思つてゐるのよ。それはさうなのよ。その上、大寺さんにすれば、冬子を外の人にやりたくないのよ。あのんだつて自分に奥さんがなく、事情さへ許せば、冬子を貰つて行きたい位の氣はあるのよ。だからそれも一つはあつて、貴方を排斥するんですよ。」

「で、奥さんはそれに對して、どんな風にお答へなすつたんです。」

小野は夫人の態度を知ると、幾らか氣も鎮まつて、改めてさう訊き返した。

「私？ 私？ かう云つて上げたわ。それやまア貴方がたが勝見家のためを思つて、さう云つて下さるのは有難いが、勝負の一家のことに就いては、私にも相當の考へがありますから、私たちでできるだけ致しますつて。だから貴方がたの御忠告は、御忠告として有難く聽いて置きますつて——。」

「さうですか。では奥さんの僕に對するお心持は、別にそのためにお變りなすつたといふやうなことは決してないんですよ。」

小野は念を押すやうに訊かざるを得なかつた。

「え、さうよ。だからかうして、大寺さんたちには悪いけれど、貴方にすつかりお聞かせしたんですわ。」

「有難うございます。」

小野は心から、さうした禮を述べるやうな氣持になつてゐた。

「ですけれども、小野さん。先輩たちがさうして、みんな反對だといふものを、此處でわざとまた此方も、反對には出られませんか。そこを貴方は、辛抱して下さらなくちや駄目よ。だから貴方がたの問題も、もつと時機を待つことにしなくてはなりませんわ。もつと辛抱して、氣長に時機を待つておれば、きつと貴方のお望み通りに、して上げられると思ひますからね。そしてその中には先輩たちも、貴方の本當の人間が解るでせうから、この後とも貴方の方でも氣を付けて、自重して勉強なすつて下さい。さうして、誰からも文句が云へないやうに、偉くなつて下さるのが一番大切よ。」

「畏まりました。奥さんさへさう信じてゐて下されば、私もできるだけ勉めます。そして先輩たちにも、悪く思はれたり反感を買つたりするのは、やつぱりみんな僕の不徳の致すところで、先輩に對して、憤るよりは、やつぱり自分で悲しむべきことですから、私も今後は十分慎みます。」

「さうなすつて下さい。私は他の人たちが何と云つたつて、貴方を相應に信用してゐる積りですからね。私だつて貴方に就いては、黒田さんにもよく訊いてみて相應に知つてゐるつもりなんです。黒田さんも、貴方は表面少しオツチコチオイに見えるけれど、素質はいゝ奴だつてさう云つてゐましたわ。だから兎に角、吳々も自重して時機の來るのを待つて下さいよ。」

夫人は慈母のやうな愛撫を以て、かう云つてくれるのだつた。そしてこのことのために、夫人と小野との間には、前よりもつと信愛の念を、増したやうな心持になつて、猶も心置きなく話し合つた。夫人は、先輩の弟子たちが、何よりも忠臣顔をして、面を犯して諫めたのに、反感をもつてゐるらしかつた。殊に小野に阿諛されて欺かれてゐるやうに云はれたのが、如何にも心外らしかつた。小野



とてもさうだつた。彼も後で自分自身でかう考へた。成程、自分の夫人に對する態度は、何かにつて殆ど忠僕のやうに、奉仕的であつたかも知れない。併し、自分の戀人の母であり、かつまた自分が信頼してゐるのみならず、自分もまた信用されてゐる人に對して、さういふ態度に出るのは、寧ろ自然ではないかと。若し腹黒い野心であればあるだけ、そんな風に正直には振舞はないかも知れないと。――また後で聞いたところに依ると、先輩たちが集まつて、小野のことを論議した際、あの濃厚を以て知られた矢部太郎氏まで、誰か小野に少し同情をもつてゐた人が、『併し小野といふ男は、決してそんなに夫人に取入らうなどいふ深い野心なんてなく、無意識にやつてゐるんだよ。』と云つたら、『無意識なら猶悪い。』と論斷したさうである。それを聞いた時、小野は今迄尊敬してゐたこの倫理學者を、一ぺんに人性を知らぬ偽善者だと反噬することに依つて、酬いるより外に術のないのを知つた。

――さういふやうなことで、先輩たちが飽く迄、小野が夫人に取入り、夫人がそれに手もなく乗つてゐると批判したのは、二人をして却つて反感を起させ、交みに庇ひ合ふ結果になつたのだつた。

兎に角、さうした譯で、先輩たちの反對は、却つて小野に有利な結果を齎した。が、併し、小野の胸の中は収まらなかつた。小野は一人ゐるときなど、よくそのことを考へて、ひそかに、憤激と憎悪とに燃えた。ある夜などは、眠られぬまゝに色々考へて、床の上に起き直つたまゝ、大寺氏のゐる方を腕に抱きかかへた。さうして心の中では、幾度か誓つた。若し彼らの反對のために、自分の一生を賭してゐる戀が、破られるやうなことがあつたら、自分の方にも覺悟がある。此方は殆ど生命を賭してゐる、いはゞ一生の幸福を、彼らが彼らの小感情のために、たゞき壊していゝならば、此方も彼らと同じ不幸を以て酬いる權利がある。彼らに、人の運命や幸福に就いて、常に考慮を拂ふべき彼らが、殆ど理由なく、此方の運命に關與し、それを狂はしていゝならば、彼らに自分を裁くだけの

權利があるならば、此方でもそれに正當の復讐をするだけの權利がある。……これが戀敵とか何とかいふもので、其方に排斥の理由があるならば、正當な方法さへとつてゐるなら、それは恕せる。が、冬子嬢と自分との問題に、何の發言權を彼らはもつか。第一彼らは果して自分の眞價が解る程、その點に就いて考慮を拂つたか……。

そんな風に熱して來ると、彼はその實行方法まで考へた。丁度その頃吳市に、自分の長官を恨んで、その子を殺した軍人があつた。自分はそれに倣ふことを思つた。丁度大寺氏は、子煩悩で有名だつた。だから萬一のことがあつたら、大寺氏自身に危害を加へたりするより、その子を殺して悲しみと與へてやる方が、ずっと効果的だと思つたのだつた。彼はその場面を想像しさへした。そして萬一法廷へ出されて、自分は審問の前に立つた時、聲高らかにかう叫んでやる積りだつた。大寺氏は自分を精神的に殺したから、それと同じ苦痛を以て彼に酬いるのは正當だと……。

思へばその時大寺氏の故障申立が、夫人に容れられないのは僥倖だつた。そして事件が、そのために毀れたのではないことは、全く自他のために幸福だつた。それにつけても、或る賢ぶつた人々が、他人の生命をかけてゐる事件に、餘計な喙を容れるには、――批評するのは勝手であらうが、――それ相應の考慮と、矢面に立つ覺悟が要る、と小野は自分に引比べて思はない譯にはいかなかつた。

併し、彼は平常は毎ものやうに穩かだつた。彼らにも穩かに對することができた。先生の月命日を以て、弟子たちが集合することになつてゐる十日會なども、彼は今迄よりも身を慎んで、その上できるだけ心置きなく、彼らに對することに努めた。彼らの方で却つて、妙に白けた態度を見せたことはあつても、小野は飽く迄それに逆らはなかつた。一つには彼がさうしてゐることが、何となく夫人の信頼に依つて、優越を感じてゐるからであつた。

その上先輩たちの反對は、冬子嬢の心を刺戟して、却つて小野との關係に、油を注いだやうな結果にもなつた。可哀さうだと思つたのか、それともその結果、母の信頼が小野の上に益々固いのを知つてからか、又はさういふ緊張した時局の刺戟に依つて、愈々心が定つて來たのか、兎も角も彼女は、すつと小野に親しい態度を見せるやうになつた。

冬子嬢は、或る時、小野にこんなことを云つた。

「……小野さん。輕薄才子つてほんとにどんなの？ 貴方のやうな人をいふの？」

小野はその冗談とも本氣ともつかない質問を、苦笑を以て受取らねばならなかつた。

「何ですつて。——ぢやア貴女も、奥さんにその話をお聞きになつたんですか。」

「いゝえ、私、自分で聞いたのよ。大寺さんとお母さんの話、私あの次のお居間にゐたもんですから、悪いとは思つたけれど、みんな聞いて了つたの。」

かう云つて彼女は、上目使ひに頷を引いて、微笑を浮かべながら小野を見た。

「へゝえ、さうですか。」小野は驚いた。「そしてどう思ひました。矢つ張り大寺さんの云ふ通りに、私のことを輕薄才子だと思ひになつたでせう。」

小野は幾らか自信を以て、反問するやうに云つてみた。

「えゝ、ほんとにさうかしらと思ひましたよ。けれど、貴方を悪い人だとは、どうしても思はれませんでしたわ。」

「さうですか。それだけ思つてゐて下されば、僕としては本望です。輕薄才子は輕薄才子に違ひないかも知れませんか。」

何とか彼とか云ひながら、小野は矢つ張り大寺さんの捺した、「輕薄才子」の極印にこだはらねば

ならなかつた。

「ほんとにさうよ。熱し易い人は、冷め易いんですもの。貴方はきつとさうよ。」

「さうかも知れませんがね。熱してゐる時は、自分でも自分が解りませんから。併しそれだけのことがあれば、多分は煥になつて残ると思ふんですけれどね。」

「私、そんなこと存じませんわ。」

話が少し本文になりかゝつたので、女の本能で、彼女は忽ちそこで打切つて了つた。が、小野は嬉しかつた。冬子嬢が大寺氏の言葉を直接に聞いてゐながら、猶少しも動かされなかつたこと、動かされなばかりか、それを彼女自身小野に報じて、二重に彼女の態度を明かにしたること、そのことは寧ろ小野を、ひそかに大寺氏に對して、それ見ると云ひたい位、得意な喜びを感じしめた。

矢は投げ返された。それは寧ろ小野たちの鎧の、案外固いことを證明するに役立つばかりだつた。

併しそれと同時に、一種の戦闘は始まつた。しかしてそれが済まない中は、小野の事件は表立つて運ばないことになつて了つた。

### 三

その後も、夫人は小野を遇するのに、決して先輩の前で、遠慮するやうなことはなかつた。遠慮しないばかりか、寧ろ宣言的に、親しくして見せる程だつた。或日、九段の能樂堂で、故先生も知つてゐられた俳人の明雪翁の、八十の賀か何かあつて、その祝賀能に席を買つた時などは、九州から來た故先生の弟子なる或る大學教授の夫人の外には、小野を一人その柵に連れて行つたきりだつた。それも、大寺氏の諫止のあつたすぐ後のことで、小野の氣のせむかは知らぬが、先輩たちもその夫人の

當つげがましい態度を見ると、鳥渡挨拶に来るだけで、苦々しげに小野を尻目にかけて行つたが、小野はそれに心を痛めながらも、それだけまた此方の氣持は、緊張して、ひそかに痛快なやうにも感じられた。

さうして又かうしてゐる間にも、夫人は冬子嬢と小野との間柄に、もつと親近を増すやうな行動をとつてくれた。

その時分、黒田が主として云ひ出して、一度四月の帝劇を見物しようといふことが、夫人に提議されてゐた。そしてそれには又、學校を卒業したら連れて行くとの約束から、冬子嬢も一緒に行くことになつた。席は夫人と冬子嬢と、黒田と杉浦と、それから小野の五つが取つて置かれた。

黒田はその頃から、先輩の弟子たちと反對に、小野の同情者だつた。彼こそ、許婚があり、そんな野心を毛頭もたぬ男とはいへ、若し少しでも競争意識をもつとすれば、最ももつのが自然な立場にゐる上に、先輩の人たちとも可なり親しいのに係らず、小野の事件を、客觀的に見て賛成してくれてゐる、小野の在來の親友以外の、唯一人だつた。彼は初め、夫人からそれとなく小野のことを諮問された時、『小野はあんな風ですけれど、素質として案外素直で、いゝ人物だと思ひますから、妙な金持の息子なんぞに冬子さんをおやりになるより、すつといふでせう。』と云つてくれたのだつた。そして彼は又、大義名分の上から云つても、先輩弟子に對する先輩の横暴を、愉快には思つてゐないのだつた。——さういふ意味で、小野は敵も得たが、又黒田に依つて味方も得た。さうしてこの際の味方は、彼にとつて實に百萬人力の思ひがあつた。で、その觀劇も、これらのいはゞ内輪同志といつた意味の、可なり楽しみ深いものだつた。

定刻になるのを待ち兼ねて、小野は特に夫人と冬子嬢とを案内して、帝劇へ赴くために勝負家へ行

つた。そして初めての觀劇のために、鳥渡着飾つた彼女達を連れて、定刻近く電車に乗つた。黒田は自分の家から、向うへ行つてゐる筈だつた。そして又杉浦も、——彼は旅から歸つて來ると、例の川の家庭教師の一件を話したところ、丁度幸ひだといふので、池田に代つて川瀬家へ行くことになり、本郷臺町の素人下宿を引拂つて、又その後へは小野が住むことになつた。——廣尾の向うの邸へ移つて行つてゐたので、これも亦その家の方から、帝劇へ來る手筈になつてゐた。で、小野は自然夫人と令嬢と、二人を伴うて行く嬉しい役目を、引受けることになつたのだつた。

電車の中でも、彼女たちと並んでゐる姿を、人々はじろく見た。が、小野はそんなことも、却つて嬉しかつた。さう自立つ程美しいのではないが、その適度な均整をもつた處女姿は、矢つ張り人目を惹いた。電車の中では、並んでゐるが餘り話はしなかつた。それも小野には静かな満足の念ひだつた。

向うへ着いたときは、もう殆ど開演時間は迫つてゐて、黒田は既に來て席についてゐた。が、杉浦はまだ來てゐなかつた。

並んで五つ席を取つてゐる、その端にゐた黒田が、皆の來たのを見て奥へ順次に移つたので、自然それから夫人、冬子嬢、小野といふ順に並んで坐ることに定つて了つた。一番入口の端は、杉浦のため明けて置かねばならなかつた。

杉浦は、幕が開いても、なかく來なかつた。一幕が終つても、まだ來なかつた。それが小野には、又何となく氣になつてならなかつた。杉浦は、又ひよつとすると、今日の觀劇に何となく氣が進まないのではあるまいかと心配した。けれども亦杉浦が來ないことは、冬子嬢といろく話合つたり、何かするのに邪魔がなくなつていゝ、といふやうな氣もしないではなかつた。來ないなら寧ろいゝとさ

へ思はれた。が、杉浦は二幕目の中頃になつて、やうやくやつて来た。「いや、遅くなつて失敬しました。丁度人が来てゐたもんですからね。」彼はかう云つてその儘むつとりとした顔を舞臺の方へ向けた。

芝居は、坪内博士の『桐一葉』だつた。場面は何でも神社の前で、腰元が大勢並んで、誰かの参詣を迎へてゐるあたりだつた。

「どうです冬子さん。なか／＼綺麗でせう。」  
 黒田が母夫人を置いて一軒隣りから、さう低くない聲で呼びかけた。

「えー——」  
 冬子嬢はさすがに、別にそれ以上の應へもできぬらしく、舞臺にちつと見惚れてゐた。その腰元たちには、本興行だつたけれど、女優たちが入つて扮してゐた。

「奥さん、どうです。どれが一番好きです。女から見ると、誰が一番綺麗に見えますかね。」  
 黒田は、毎もの通り、口を休めないでそんなことを訊き出した。

「さうねえ。——此方から二番目の人はどう？」  
 夫人も、少しは仕方なしに、相手になつて答へてゐた。

「あゝ、あれですか。あれは初瀬浪子でせう。成程、奥さんらしい好みですね。御自分と反對に、しうつと背の高いのがいゝんでせう。」

「馬鹿おつしやい。でも、一番女優としては、目鼻立がはつきりしてゐるぢやありませんか。」  
 「ぢやア冬子さんは？ 貴女はどれが一番いゝと思ひます。云つて御覽なさい。」

黒田は更にかう試験的な回答でも採るやうに、興味を以て促した。

「私？ 私ど的人がいゝんだか、みんな同じやうで分らないわ。けれど……。」と彼女は見渡して、恰も秘密を打明けるやうに小聲で、「あの左から三人目の方がよくはななくつて。」

「へゝえ、さうですか。冬子さんがあんな面白い顔の人が好きとは意外ですね。」黒田は又そんな風に批評してゐた。

小野には、冬子嬢の答は、興味を以て聞いてゐたが、向うの黒田の方を、反對に向いて低い聲で答へたので、よく聞き取れなかつた。で、それを機会に、話の中へ割り込む必要もあつて、

「え？ どれですつて？」

と、訊き返さざるを得なかつた。冬子嬢は顔を此方へ向けた。そしてそのため、小野と思ひの外近近と顔を寄せるやうになつて了つたまゝ、もう一度舞臺の方を物色しながら、彼女は云ふのだつた。

「あの、ほら左から三番目よ。今、裾のところを鳥渡直したでせう。あの人よ。」

「へゝえ、あれですか。あんなにぼつてりしたのが。——」  
 小野も黒田と同じく、一應抗議めいたことを云つた。

「だつて可愛いぢやないの。」  
 「さうですかねえ。——僕は又、貴女と反對に、その次の、左から四番目の、少し願のしやくれてゐるのがようござんすけれどね。——杉浦。君はどれがいゝ。」

小野は左にゐる杉浦にも、話題を向けるやうから問ひかけた。

「うん、俺はみんないゝよ。そしてみんな悪い。」

彼はそんな風に、わざと超然としたことを云つた……。  
 そんなことをしてゐる間にも、小野は冬子嬢と並んだ地位を、感謝しつつ享樂するのを忘れなかつ

た。彼はそんな話をしてゐる拍子に、冬子嬢の手が、此方（こなた）を向くと同時に、椅子の肘掛けの上へそつと置かれたのを見てとつた。そして話が済んで後も、其處にその儘放置されてゐるのを、矢張り殆ど第六官を以て、明かに知つてゐた。で、話が切れて、皆の注意が悉く舞臺に向つた時、思ひ切つてそつとその方に手をやつた。何となく又冬子嬢の心を、はつきり掴む試みのやうな積りだつた。で、さう不安はないながらも、恐々ながら差出したのだつた。と、熱した彼の半掌が、思ひの外に冷たい彼女の半掌に重なつた。小野はどき／＼しながら、その儘氣がつかないやうに、そつと重ねて置いた。が、彼女はそれをすぐには引込めなかつた。その間一二分に過ぎなかつたかも知れないが、小野には五六分位に感ぜられた。それで彼は更に自信を増してもう許されたかの如く、意識的に掴むやうに、ぎゆつと軽く力を入れて抑へた。と、彼女は前から知つてはゐたと見えて、別に今氣がついた風は見せずに、その儘鳥渡暫く置いておいた後、そつと手を引いて了つた。で、小野はそれつきり、爲すところもなかつたが、それだけでも彼は満足しなければならなかつた。

けれども、小野は、もう一度さういふ機會を逃さなかつた。それはその幕が済んで、食堂へ行くために、皆が立つた時だつた。夥しい人の流れは、その食堂へ赴く廊下へ出る方の、横の通路に一ぱい話つてゐた。そして殆ど各人押し合ふ位、間隔を離れずに進んでゐた。と、小野と冬子嬢は、夫人を前にして、また二人斜に相並んでゐた。そして初めは偶然、冬子嬢の左の手と、小野の右の手とが、混雜の中で相觸れた。小野はふとまた、漫ろ氣を出した。そして一旦放れた彼女の手を、びつたり着いてゐる人混みの間に探した。それはすぐに求め得られた。そして彼は、殆ど行進を促すためのやうに、それを押しやる如く握りしめながら、廊下への出口のところまで、まるで人に知られるゝ處れなく、相觸れて行くことができた。今度は冬子嬢の方でも、人に知られる危険がないと見てとつたか、また

はすつかり身を接してゐるので、避ける方法がないと觀念したか、決して振り放さうとはしなかつた。小野は廊下へ出ると、さりげなく一緒に食堂へ入つた。そして母夫人や友人に伍しながら、そんな怪しからぬ所業をして、甚だ悪いとは思ひながらも、ひそかなる喜びに満たされてゐたのだつた。

「どうです、奥さん。この芝居は面白いですね。」

黒田は食事の間も、そんな風にまた批評めいた無駄口を始めた。

「えへ、私好きよ、かういふどちらかといへば、武張つた一番物目の方が——。」

「成程ね。それに幸四郎の且元もなか／＼よく演つてゐますよ。第一顔の扮りがいゝ。別に變つた譯ではないけれど、あれでもつと科白が神經質だと、もつと深みがあるんだけれど。……且元の孤忠が月並だけれど、さういふ道徳觀は、やつぱり悪い氣持はしないでですね。」

「さうね。」

夫人も別に厭がりもしないが、また氣乗りがして相手になるといふ程でもなく、穩かに合槌を打つてゐた。黒田は猶も圖に乗つてこんなことを云ひ出した。

「どうです奥さん。どうやら先生歿後の勝見家と、この芝居とは似てはゐませんかね。奥さんはさしづめ淀君さ。そして大寺氏の片桐且元といふのはどうですか。」

「そして。」と、杉浦も傍から面白がつて口を入れた。悪口めいたことなら、彼も引込んでゐるなかつた。

「小野の石田三成は動かない所だね。」

「馬鹿なことおつしや。」

「馬鹿さう。」

夫人と小野とが、かう云つたのは殆ど同時だつた。そしてその見立は、微苦笑を以て承認された形になつた。

「ところで君の役は何だい。」

小野も面白づくで黒田に言つた。

「俺か。云ふまでもなく木村重成さ。」

「役過ぎるわ。」夫人が辛辣に云つた。「黒田さんは、あの裏に隠れてゐて片桐の誠忠を立聞いてゐながら、感心して目玉をくり抜く間者よ。氣の早いところが似てゐるわ。」

「いや、そんなことありませんよ。僕ほどの立役者に、そんな役を振つちやア、芝居になりやしない。」

「僕も三成は柄にない。」小野も云ひ出した。「三成は一つ杉浦に廻して小姓銀之丞を買つて出るよ。」

「ふん。」黒田はちらと冬子嬢の方を見やりながらわざと蔑すむやうに小野に云つた。「役處は合つてゐるが、さぞ可愛くない銀之丞だらうな。」

「冬子さんは蜻蛉で納まりますか。」

杉浦も、親愛と皮肉との例の混合で、かう言ひ出した。

「知らないわ。」

そんなことで、皆は笑語の中に食事も終つた。……歸りも、小野は夫人と冬子嬢とを、家までまた送り届けることになつた。と、途中で、冬子嬢は今日見た芝居に關する話から、こんな感想を云ひ出した。

「……可哀さうね。あの腰元の蜻蛉つていふ女。私、あの銀之丞つていふのが、憎らしくなつちやつたわ。馬鹿の癖に、あんなに附けまゝとふんでもの。」

「何ですつて。」小野は冗談半分に、併し半ば眞面目で、彼女の顔を見返しながらかう云つた。「反對ぢやありませんか。あの銀之丞の方が、よつほど可哀さうですよ。」

「それやア貴方はさうかも知れませんが……。」

かう云つて彼女は、後を濁したまゝ少しくすりと笑つた。

「さうですよ。ほんとにさうですよ。」

小野も微笑を以て、さう斷定するやうに繰り返したが、何だか鳥渡冗談でないやうな思ひがした……。

兎もあれ、併しさうした状態は、引くるめて小野には楽しいに違ひなかつた。共同の敵、さうした思ひに對して、彼らの盟はだん／＼固くなり行く傾向だつた。が、併しその頃、また突然妙な第二の故障が、彼らの前に現はれた。

## 第十一章

かうして、先輩たちの故つた第一の反對の矢は、まづ勿ね返された結果になりつゝあつた。けれど、その時突如として、第二の矢は、何處からともなく飛び來つた。眞に何處からともなく、流れ矢のやうに不意に飛び來つたのであつた。

それはまた、一通の無名の怪しい手紙だつた。